

# 巻頭エッセイ

## 重たかったキャッチボール

一般財団法人民事法務協会 監事 余田 武裕

今から30数年前、地域のソフトボールクラブに入会した。市報に掲載されていたソフトボールクラブの会員募集の記事の「初心者歓迎」の文字に惹かれたのである。当時、監督が84歳で、80歳代から30歳代の幅広い年齢の会員で構成されているクラブであったが、30歳代の会員は私のほかには数人しか在籍していない中高年層の会員が中心のクラブであった。練習は、月に数回程度、日曜日の3時間、入念な準備運動から始まり、会員の元プロ野球選手の指導の下に、キャッチボール、打撃・守備練習等を行うという本格的なものであった。対外試合等にも積極的に参加し、成果をあげていた。ソフトボールが好きな様々な職業の人が集まっている楽しいクラブであった。

ある日、クラブに新人としてAさんが入ってきた。当時72歳くらいであったと記憶している。高齢のほぼ初心者の新人であったため、怪我をされないかが心配だった。Aさんは、練習に真面目に取り組み、徐々にキャッチボールの投球も早くなり、守備も上達された。甚だ失礼ではあるが、70歳過ぎてソフトボールを始めても上達するものなのかと感心させられたものである。また、Aさんは、練習場には早く来て、グラウンド整備、道具の整理等を率先して行い、試合中はベンチにいて打者のバットの

片付けなどをするなど、謙虚であり気配りがすばらしい人柄という印象で、私は、Aさんを尊敬していた。

ところで、クラブでは、毎年12月の最後の練習日に納会が開催されていた。納会では、一人ずつ、その年の反省と翌年の抱負などを発表することになっていた。Aさんに順番が回ってきたとき、Aさんは、「この年齢なので、いつまで球を投げられるかわからない。キャッチボールをするたびに、これが最後になるのではと思いながら球を投げている。私にとって、キャッチボールの一球一球がとても大切なのです。」と言われた。その言葉は、なぜか私の心に響き、鮮明に記憶に残った。その納会以降、Aさんが投げるボールを受けたときには、球が重く感じ、何だか気が引き締まる思いをしていた覚えがある。

あれから30年くらい経った。あと数年であの時のAさんの年齢になる。当然のことながら、私自身、若い頃と比較すると、体力や筋力は相当低下しており、このまましていると、日常生活にも支障が生じるのではないかと考え不安になり、覚悟しなければならないと感じている。Aさんの言葉が蘇ってくる。私は、当時、あの発言は、Aさんの身体の衰えに対する不安や覚悟から出たものだと受け取っていた。そのため、納会以降、Aさんの投球を受けるとき重く

感じていたと思われる。しかし、今、改めてAさんの人柄に照らして言動や表情を思い返してみると、あの言葉は、単に身体の衰えに対する不安や覚悟ではなく、日々を大切に生きていこうという気持ちの現れだったのではないかと思われてきた。70歳を過ぎてからソフトボールチームに入会されたのも、その考え方の一環だったのではないかと。そこで、私も、身体の衰えを嘆き、覚悟をするのではなく、前を向いて楽しく生きていかなければならないと思うようになった。

Aさんは、今は100歳を超えておられると思う。もしも叶うのならば、Aさんにお

目にかかり、あの時の気持ちと、その後の生き方、過ごし方など、ゆっくりと伺ってみたいと思っている。

私は、老後を楽しむための健康管理の一環として、ウォーキングを日課としているが、かかりつけ医にもっと筋力を向上するようにとの指導を受けたので、何らかの新たなトレーニングを加えてみようかと思っている。また、10年ほど前、地方勤務となった機会にクラブを退会しているが、最近、今もクラブが存在していることを知った。そこで、とりあえず体力・筋力を向上させ、暖かくなってきたらクラブに再度入会するつもりである。